

バレエ『ドン・キホーテ』の舞台衣裳のデザイン・制作

—メルセデスとエスパーダの衣裳—

富田 弘美

バレエ『ドン・キホーテ』に登場するメルセデス（大道の踊り子）とエスパーダ（闘牛士）の衣裳デザイン・制作を目的として物語の把握、演出・振付家の意向、役柄の特徴、衣裳デザイン、材料、縫製、舞台上での衣裳確認等を行い、以下の結果を得た。

衣裳の色彩はペアデザインで白を基調とし、緑と金色をアクセントとして大人の落ち着きや爽やかな豪華さを表現した。メルセデスの衣裳は円形の3段ティアードスカートのロマンチックチュチュで、エスパーダの衣裳は、現在の闘牛士の衣裳を基にして金色のリボンレース、ストーンなどで表面装飾を施した。

これらの舞台衣裳は、ダンサーの高度な技術による動作を妨げることがなく、マントの大きさと振付、照明による表面装飾の輝き、白と緑の配色による場面転換、ペアデザインなどの効果により、二人のダンサーの息があった踊りを明快に表現するのに役立った。

キーワード：バレエ 舞台衣裳 闘牛士 ドン・キホーテ 大道の踊り子

1. はじめに

小説『ドン・キホーテ』は、1605年に『ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ』として作家ミゲル・デ・セルバンテスによって前編が、後に後編が出版された。バレエ『ドン・キホーテ』は、初演1869年モスクワ・ポリショイ劇場で、振付はマリウス・プティパ、音楽はレオン・ミンクスによって上演され、その後、多くのバレエダンサーおよびバレエファンを魅了している作品である¹⁾。

本報では、2015年12月12日、13日、シアター1010、構成・演出・振付は中原由美子氏によって開催されたバレエ公演『ドン・キホーテ』の舞台衣裳のデザイン・制作について報告する²⁾。

舞台衣裳に関する研究では、オートクチュールデザイナーによる歌手の衣裳、舞台上の人物表現に対する衣裳の価値についての報告などはみられるが^{3) 4)}、バレエ衣裳のデザインおよび制作に関する報告はみられない。

この公演では、キトリの第1幕の町娘の衣裳、バジルの町男と結婚式の衣裳、ドン・キホーテの鎧と帽子、サンチョ・パンサの衣裳、キューピットの衣裳など8点の作品を制作したが、本報では、メルセデス（大道の踊り子）とエスパーダ（闘牛士）のペアデザインの衣裳について報告する。

2. 方法

(1) 衣裳デザインの設定

①物語の把握とデザイン決定

物語のあらすじは、パリ・オペラ座バレエ団およびアメリカン・バレエ・シアターのDVD^{5) 6)}、『ドン・キホーテ』の小説など^{7) 8)}を参考にし、役柄、衣裳の色彩と素材の効果、演出効果、登場者の順序、組み合わせや人数などを把握した。次いで、メルセデスとエスパーダ、さらに闘牛士の衣裳についてデザイン傾向を掴み、デザイン画にまとめた。

②衣裳と演出・振付

演出・振付の意向やヘアスタイルと髪飾りの組

み合わせ、身体の動き、出演順序、出演前準備等を打ち合わせてデザインを決定した。

(2) 衣裳の制作と管理

①衣裳制作の流れ

衣裳制作は身体サイズの採寸、製図、材料設定、裁断、仮縫い合わせ、1回目の仮縫い点検、補正と修正、本縫い、2回目の仮縫い点検を行って仕上げた。

②衣裳の管理

舞台上の通し稽古において、ダンサーの動作による衣裳のシルエットや身体の動きやすさ、照明による色彩効果などを確認し、補正・管理（丈、幅の調整、アイロンかけ、汚れ落としなど）を楽屋にて行った。

3. 結果および考察

(1) 物語の把握と特徴

①バレエのあらすじ

バレエに登場するドン・キホーテは主役ではなく、物語の所々に出てくる脇役的な存在であり、スペインの明るく陽気な雰囲気と即興的な自由さ、大らかな遊び感覚による宿屋の娘キトリと床屋のバジルのラブコメディである。

プロローグは原作と同じ内容であるが、ドン・キホーテが書齋で騎士道物語を読みふけり、現実と空想の境目がわからなくなって従者サンチョ・パンサと幻想のドルシネア姫に導かれて旅に出かける^{7) 8)}。

第1幕は、陽気に賑わうバルセロナの街、キトリとバジルは恋人同士だが、キトリの父親は金持ちの貴族ガマーシュと結婚させようとする。広場では、さっそうと登場したエスパーダ（闘牛士）と恋人のメルセデス（大道の踊り子）は、闘牛を模した踊りやスペインの踊りなどを披露する。そこに突然、ドン・キホーテが現れてキトリをドルシネア姫と思い込んでしまう。

なお、第2幕で登場するメルセデスと大道の踊り子を別の設定にする場合もあるが、この公演では同一人物として設定した。

第2幕はキトリとバジルが駆け落ちをし、森の中で隠れているところを父親に見つかる。そこで、

バジルが狂言自殺をするが、ドン・キホーテが来て騎士道精神を発揮して父親に二人の結婚を説得する。第3幕では、キトリとバジルの結婚式が盛大に行われ、ドン・キホーテはドルシネア姫を再び探しに旅にでる⁹⁾。

②バレエの高度な技術的と人気

バレエ『ドン・キホーテ』には、メルセデス、エスパーダ、キトリ、バジルによるグラン・パ・ド・シャ（180度に開脚して跳躍する）、キトリのグラン・フェット・アン・トゥールナン（32回転片脚で回転する）、バジルのトゥール・ア・ラ・スゴンド（横に上げた脚を伸ばしたまま踵の上下で回転する）などの超絶技巧が次々と登場し、観客はその動きに惹きつけられ、またダンサーとしての見せどころになっている¹⁰⁾。

(2) 衣裳デザイン

①闘牛士の衣裳

バレエの衣裳作品を創作的にデザインするには、基本的な闘牛士の衣裳構成や歴史的なデザインの変遷などを把握する必要がある。

闘牛は中世から国王を迎えた祝事や王族の結婚式などでは不可欠なものであったため、闘牛士は度々不幸にも命を落とすことがあった。そこで、闘牛士の衣裳は unnecessary 部分を省き、身軽に動けるように変化していった¹¹⁾。

図1のA（1778年）では、上着の折り返し袴が大きく、サッシュベルトの幅も広がったが、B（1804年）では、袴が小さくなり、キュロットもできるだけ下半身にぴったりと合わせ、サッシュベルトは薄手になった。C（19世紀末）では、ほぼ現在の衣裳の形態を成している¹¹⁾。

エスパーダとは、最後にとどめを刺す剣のことであるが、バレエ『ドン・キホーテ』では花形闘牛士を指している。さらに、A.ラシネは、「現在の闘牛になったのは、18世紀末以降である。闘牛士も、まず馬に乗り槍で牛を突き怒らすピカドール、紙片やリボンのついた投槍を突いて牛を怒らすバンデリリェロ、チュロ、最後に牛を仕留めるエスパダの四身分に区別されるようになった」（ラシネ 32）¹¹⁾と記述している。

エスパーダの衣裳は、厚手の刺繍、金属の薄片、

絹装飾などで彩られて最も豪華なものであった。上着、丈の短いベスト、ジャボのあるシャツ、(ポケット付)、ネクタイ、被り物(モンテリリヤ)、短くびったりしたキュロット、靴下はピンク系の肌色、靴は花型飾り付きで甲の部分が大きく開いたもの(ファハ)、絹の腰帯(サッシュベルト)、上質ラシャ地の丈長マント(腰帯と同色)であった¹¹⁾。



A (1778年) B (1804年) C (19世紀末)

A.ラシネ『世界の服飾1 民族衣装』より

図1 闘牛士の衣裳の変化

②デザインコンセプトと衣裳構成

メルセデスとエスパーダは恋人同士なので、ペアデザインの衣裳でパートナーであることを強調した。また、情熱的なスペイン舞踊やフラメンコなどでは、赤と黒のコントラストの強い配色の衣裳が多いが^{5) 10)}、あえて白を基調とし、緑と金色をアクセントとした大人の落ち着いた、爽やかな豪華さを表現し、コンセプトとして既成概念にとられないデザインを試みた(図2)。

②-1メルセデスの衣裳デザイン

衣裳構成は図2(左)のデザイン画のように、ストラップ付きの身頃にバスト部分を胸当て布で包んでセクシーさを強調し、前中心の開きは編み上げによって時代の古さを感じさせた。スカートは円形の3段ティアードでフレアとギャザーのフリルが多く入っているので軽やかに見える素材が必要である。また、スカートの下には2段のパニエを入れて膨らみを保持させた。

②-2エスパーダの衣裳デザイン

図2(右)のデザイン画のように、エスパーダの衣裳は前述の闘牛士の衣裳構成を基にして、

ジャケット、ベスト、キュロット、シャツ、サッシュベルト、ネクタイ、マントなどで構成したが、被り物、ベストのポケット、ジャボは省略し、靴下と靴は白いタイツとバレエシューズとし、シャツは既製品、ネクタイは現代の結び方を模した。



図2 メルセデス(左)とエスパーダ(右)のデザイン画

③衣裳の材料

裏うち布は、水通しをしたやや厚手の木綿生地(白、ツイル)を使用した。これは、バレエは大量の汗をかくので表に滲まないこと、激しい動きや舞台衣裳として繰り返し着用することに対して丈夫にすることからである。

③-1メルセデスの衣裳

身頃は白のペロア、袖は白のオーガンジー、スカートとパニエはオーガンジーと30と50デニールのチュール(ポリエステル100%)を使用した。胸当てや胸元の切替えラインなどには図3の表面装飾A、B、D、Eの金色のリボンやブレードを、スカートの裾にはC金色のトーションレースなどを縫い付け、縁取り用として茶色のバイヤステープを使用した。また、熱着ストーン(透明なクリスタル、緑)を付けた。身頃の裾と衿ぐりの縫代の始末には白1.2cm幅のバイヤステープを使用した。腰に付けたスカーフは緑のジョーゼット(ポリエステル100%)でドレープを出し、胸元のパネルや肩には、緑のファイユ(ポリエステ

ル100%)を使用した。

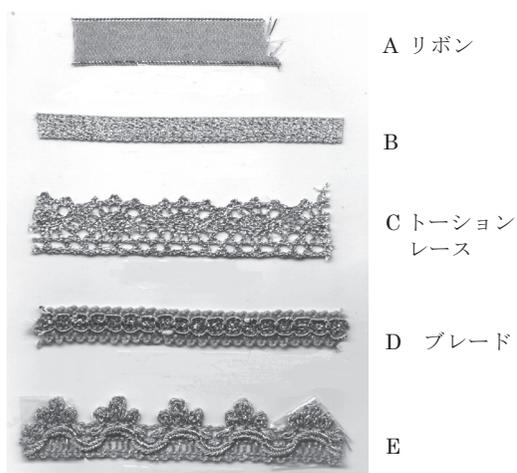


図3 大道の踊り子の表面装飾の材料



③-2 エスパルダの衣裳

ジャケット、ベスト、キュロットは白のペロアを、袖とパンツの側面には女性の衣裳と同じ緑のファイユを使用した。

前面や背面には、図4の表面装飾の金色ペアレースA、BやリボンレースD、E、金色と茶色のブレードF、G、袖中央とキュロット側面にはリボンレースEを使用し、熱着ストーン（透明クリスタル、緑、茶色）を付けた。さらに、サッシュベルトとネクタイはワインレッドのペロアを用い、マントは赤と白のサテンを表裏に用いた。

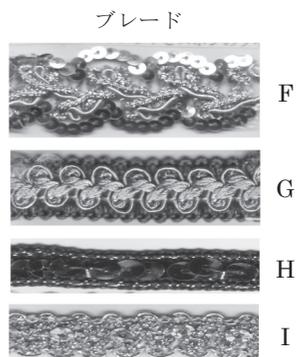


図4 エスパルダの表面装飾の材料

(3) 衣裳の製図と制作

①メルセデスの製図と制作

図5の製図に示すように、身頃は身体にフィットさせるために全体で13パーツからなるローウエストスタイルである。肩のストラップや前中心の三角部分は、緑のファイユで白とのコントラストをもたせてアクセントにした。裾と衿ぐりの縫い代はバイヤステープで包んで処理をした。開きは後ろ中心にあり、ホックと糸ループによってサイズの調整を可能にした。肩甲骨の張りによる後ろ身頃の緩みや肩のストラップは、カーブの縁に穴糸で1cm幅の千鳥がけをし、その中に平ゴムを通してフィットするように縮めた。

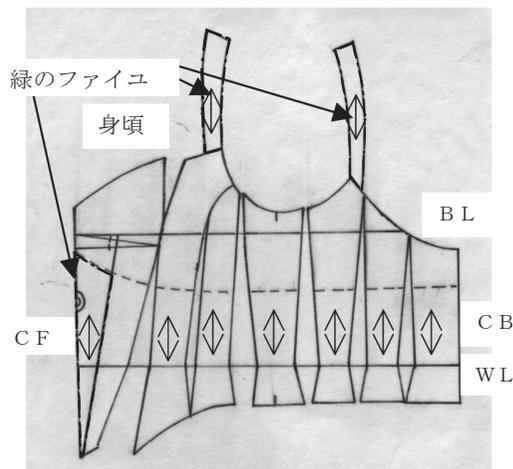


図5 大道の踊り子の身頃の製図

図6の胸当てでは前中心にギャザーを入れて立体的にした。袖は図7のA線でオーガンジーを折って二枚重ねにし、点線部分にゴムを通してギャザーを作り、端は巻ロックをし、肩のストラップに糸ループで留め付けた。

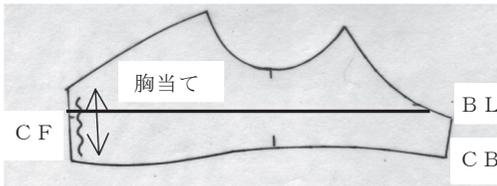


図6 大道の踊り子の胸当ての製図

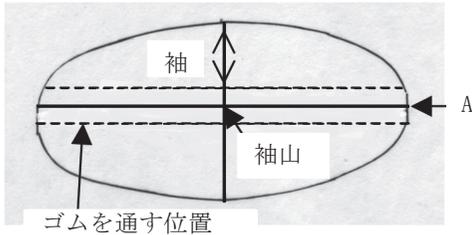


図7 大道の踊り子の袖の製図

スカートの製図は図8のように1/4の扇型を基にした全円で、3段のフリルが付いたティアードスカートである¹²⁾。

スカートを軽くするために、全円の50Dチュールの土台スカートにオーガンジーを使用し、表1のギャザー量を入れた。裾には金色のトーションレースを付けたものを、1段、2段、3段の位置に縫い付けた。

図9のパニエは、木綿の全円土台スカートに30Dと50Dのチュールに1.5倍のギャザー量を入れ、表スカートと同様に各チュール付け位置に縫い付け、ウエストで表スカートと合わせてストレッチのベルトを付けた。

②エスパダの製図と制作

図10に示すように、エスパダのジャケットは前中心突合せて開き、衿は前が丸く削れたスタンドカラー、肩には肩当てが付いている長袖である。

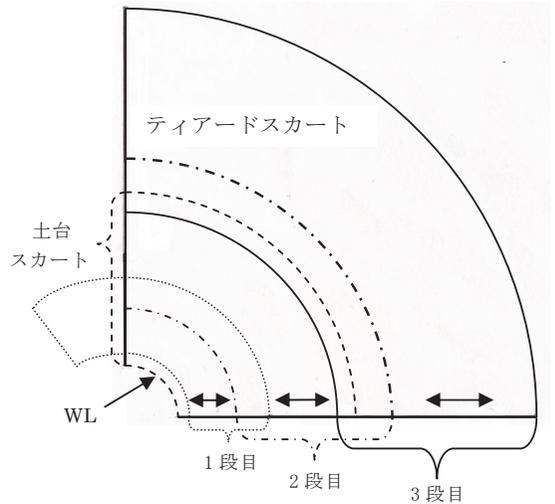


図8 ティアードスカートの製図

表1 スカートのフリル量

	1段目	2段目	3段目
ギャザー量 (倍)	1.3	1.5	1.5
1/4 接ぎ合わせ枚数 (枚)	4	6	6
1/4 裾まわり寸法 (cm)	76.5	84	124.5
全体裾まわり寸法 (cm)	306	504	747

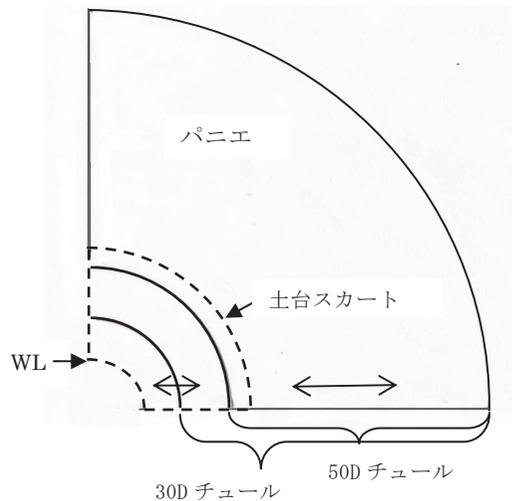


図9 パニエの製図

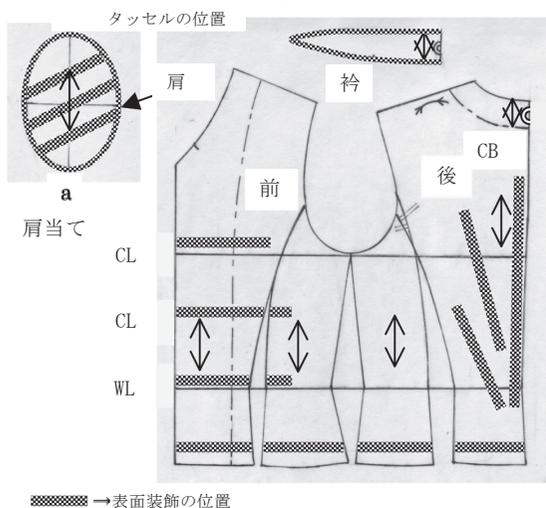


図10 エスパーダのジャケットの製図

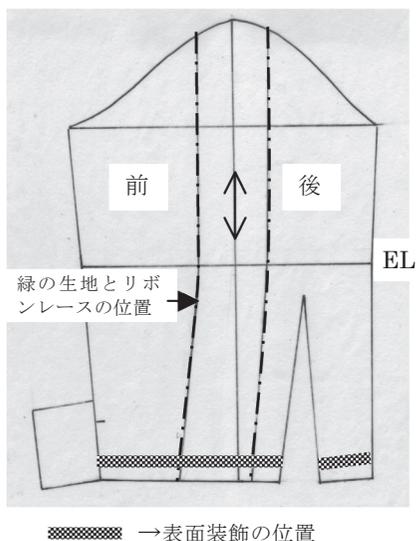


図11 ジャケットの袖の製図

後ろ身頃の表面装飾は、中央にリボンレース E と左右にペアレース A、B とストーンを付け、前身頃にはリボンレース D とブレード F、I を 3 段、裾には H を付けた。なお、これらはドライクリーニングに耐える水溶性の接着剤を使用した。

衿にはブレード I とストーンを、肩当てにもブレード I を付け、a 位置にはタッセルを付けた。

図 11 の袖の表面装飾は中央に緑のファイユとその上に金色のリボンレース E、G を付け、袖口にはブレード F、H を付けた。

図 12 のベストの表面装飾は、前身頃にブレード G とリボンレース D を 3 段に付けた。後ろ衿ぐりと袖ぐりの縫い代は見返しで処理した。

図 13 のキュロットは膝下丈で、裾にゴムを入れた。また、ウエストも同様である¹³⁾。キュロットの側面には袖と同様に緑のファイユと金色のリボンレースを付け、裾にも金色のリボンレース E、G を付けた。

キュロットは裏うちはせずに、ベロアの伸縮性によって着易さを重視した。

図 14 はマントの製図である。生地はドレープが出やすいサテンで表裏が赤と白である。横幅は両手を広げた長さに調整した。衿は省略した。

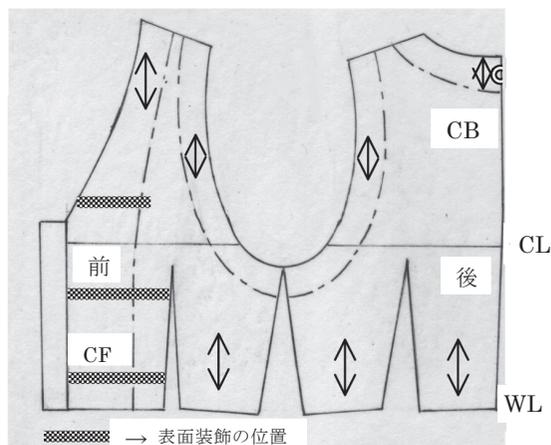


図12 ベストの製図

図 15 のサッシュベルトは、ワインレッドのベロアを使用し、裏には伸び止めとして不織布の芯地を張り、5 段のプリーツ（陰ヒダと表ヒダ部分）をたたんで陰ヒダをミシンで押さえた。留めは後ろで面ファスナーとカギホックを使用した。

図 16 のネクタイもワインレッドのベロアを使用し、長さは短めで結んだ状態に作り上げ、ゴム紐で衿ぐりに面ファスナーで留めた。

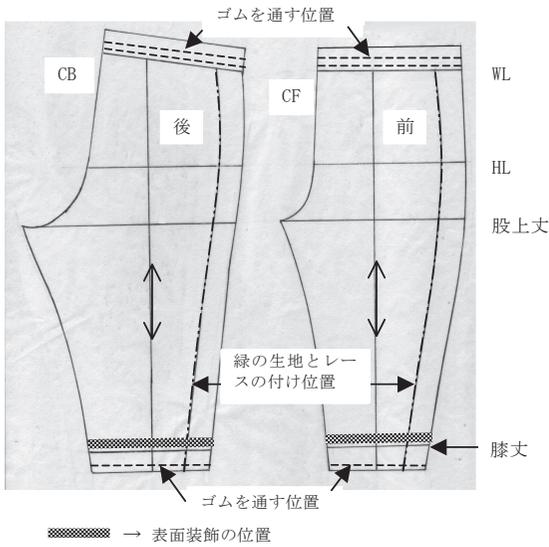


図13 キュロットの製図

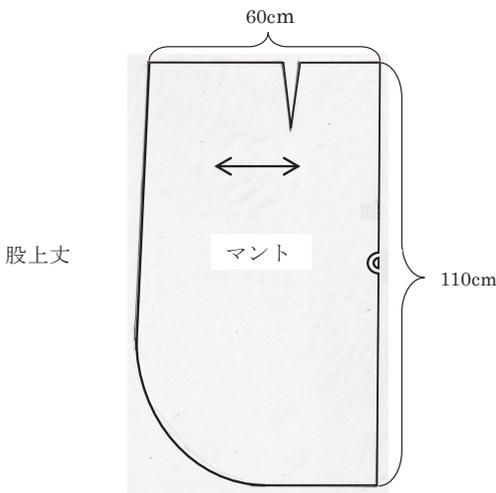


図14 マントの製図

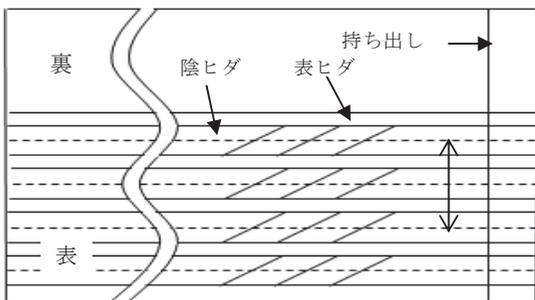


図15 サッシュベルトの製図

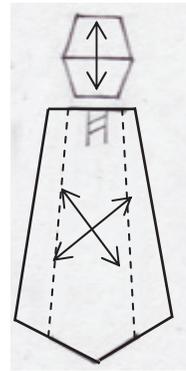


図16 ネクタイの製図

(4) バレエの動きを遮らない工夫と完成衣裳

①メルセデスの衣裳

・スカートは『ドン・キホーテ』の見せどころであるグラン・パ・ド・シャという180度に開脚してジャンプする動作を妨げないような裾幅の広さに仕上げた。

・スカートの素材は、ギャザーとフレアを多く入れるために薄いオーガンジーを使用し、軽やかな雰囲気仕上げた。

・胸の当て布はバストを強調し、ウエストを細く見せるとともにセクシーな大人の女性を表現していた (図17、図18)。

②エスパーダの衣裳

・実際の闘牛士のジャケットはウエスト丈くらいであるが、バレエ衣裳としては高い跳躍を伴う激しい動作と前開きで着用することからサッシュベ



図17 メルセデスの衣裳 (前面) (側面)



図18 メルセデスの胸部表面装飾

ルトやキュロットがウエストから飛び出さないようにやや長めにした。

・ジャケットの前身頃は前中心で開けて着用することや、ベストはカギホックで閉じて着用する。また、袖が付いていないことなどから腕の上げ下ろしの動作がしやすい構造になっている。

・マントは小道具として細やかな振付に対応できるように両手を広げた長さに調整した。(図19、図20)。

・キュロットは、本来は膝下で紐によってフィットさせるが、動きやすくするためにゴムを入れた。また、ウエストも動きやすさと制作のしやすさからゴムを入れてで仕上げた。

・伸縮性のあるペロア素材によって、より動きやすくした。特にグラン・パ・ド・シャという開脚して高く跳躍する動作を妨げないようにした。

(7) 物語の内容に沿わせた衣裳・装飾の工夫

①メルセデスの衣裳

・胸当て中央にギャザーを寄せてストーンの飾りを付け、金色のブレードと茶色のバイヤステープで縁を飾った。これは中心のアクセントになる装飾によって身体を引き締め、立体的に見えるようにするためである。

・ウエスト右側には緑のファイユでスカーフを巻き、アクセントカラーとしての効果をもたせた。

②エスパーダの衣裳の工夫箇所

・命がけの闘牛士を讃えて、金色で輝くスパンコールの入ったブレードや繊細な唐草模様のペアレースで豪華さを表現した。



図19 エスパーダの衣裳 (前面) (側面) (後面)



図20 エスパーダのマント

・キュロットや袖の側面は、豪華な装飾が効果効果的に見えるように配置した。

・ジャケットの背面は最も広く、多様な動作によってよく装飾が見える箇所であるため、装飾の量を多くして豪華さを表現した。

(6) バレエ公演の衣裳

図 21 は、2015 年 12 月 12 日、13 日シアター 1010 にて開催された中原由美子氏の構成・演出・振付によるバレエ・フレイグランス公演『ドン・キホーテ』である。ダンサーは、エスパーダ・松田耕平（牧阿佐美バレエ団）、メルセデス・高木綾、町衆・松田健輔（左）、阿部賢治（右）（東京シティバレエ団）である。

また、衣裳はダンサーの高度な技術による動作を妨げることがなく、動きに伴って生じる赤いマントのドレープやダイナミックなマントの振付効

果、金色のリボンレースやストーンの表面装飾の輝き効果、白と緑のコントラストと場面転換効果など、息が合った踊りがペアデザインによってさらに明快に表現されていた。

4. まとめ

バレエ・フレイグランス公演『ドン・キホーテ』第 1 幕に登場するメルセデス（大道の踊り子）とエスパーダ（闘牛士）の衣裳デザイン・制作を目的として、文献による物語の把握、演目内容と演出、衣裳制作工程、舞台上での衣裳効果などを確認し、以下の結果を得た。

- ① 19 世紀末に闘牛士の衣裳は、上着の折り返し衿、薄手のサッシュベルト、下半身にぴったりと合わせたキュロットなど、不必要な部分を省略して身軽に動けるように変化していった。
- ② 衣裳デザインのコンセプトは、メルセデスとエスパーダは恋人同士なのでペアデザインの衣裳でパートナーを強調し、既成概念にとらわれずに白を基調として緑と金色をアクセントにし、大人の落ち着きや爽やかな豪華さを表現した。
- ③ メルセデスのロマンチックチュチュの衣裳は、円形の 3 段ティアードスカートが軽やかに仕上がり、胸の当て布でバストを強調したセクシーな大人の女性を表現し、動きを妨げない裾幅にした。
- ④ エスパーダの衣裳は、ジャケット、ベスト、キュロット、シャツ、サッシュベルト、ネクタイ、マントなどで構成し、前身頃、後身頃、袖中心、キュロット側面に金色のリボンレースなどで表面装飾を施し、伸縮性のある素材や裾のゴムなどで動き易くして豪華な花形闘牛士を表現した。
- ⑤ バレエ公演『ドン・キホーテ』は、2015 年 12 月 12 日、13 日、シアター 1010 において中原由美子氏による構成・演出・振付で開催された。舞台上の衣裳は、ダンサーの動作を妨げることがなく、マントの大きさ、金色のリボンレースやストーンの表面装飾の輝き効果、白と緑のコントラストと場面転換効果、ペアデザイン効果などで息が合った踊りが明快に表現された。



図 21 バレエ・フレイグランス公演
『ドン・キホーテ』
撮影：和田 修

引用文献

- 1) 林 愛子 林田直樹：バレエおもしろ雑学辞典. pp.170-171 (ヤマハミュージックメディア, 東京, 2006)
 - 2) 中原由美子：バレエ・フレイグランス公演 クリスマス第5回講演『ドン・キホーテ』全3幕プログラム (フレイグランド・クリスマスプロデュース, 東京, 2015)
 - 3) 砂長谷由香 小橋宏美：舞台衣装にみるオートーニナ・リッチのアシンメトリーベアトップドレス。服飾文化学会 (作品編) 6 : pp.47-55 (2013)
 - 4) 佐々井 啓：舞台衣装と流行. 実践英文学 62 : pp.59-67 (2010)
 - 5) パリ・オペラ座バレエ団：ドン・キホーテ DVD. (TDK コア, 東京, 2002)
 - 6) アメリカン・バレエ・シアター：ドン・キホーテ DVD. (ワーナーミュージック・ジャパン, 東京, 2012)
 - 7) セルバンテス：岩波少年文庫 ドン・キホーテ. 牛島 信明 (訳). pp.11-20 (小学館, 東京, 2000)
 - 8) セルバンテス：ドレの絵で読むドン・キホーテ. ヴィルジニ・妙子, ヴィルジンリ・クリスティーナ・幸子 (訳). pp.8-10 (人物往来社, 東京, (2011)
 - 9) 小学館：華麗なるバレエ第5巻 ドン・キホーテ. pp.4-19, pp.28-30 (小学館, 東京, 2009)
 - 10) 新国立劇場：ドン・キホーテ物語
http://www.nntt.jac.go.jp/ballet/don_quixote/
2015-2016
 - 11) A. ラシネ 石山 彰 (編)：世界の服飾1 民族衣裳. pp.32-34, pp.112 (株式会社マール社, 東京, 1999)
 - 12) Claudia R.Folts : The Ultimate Ballet Skirt. pp.7-10. (Tutu. Com, North Carolana USA, 2002)
 - 13) 文化服装学院：文化ファッション講座男子服. pp.75-77 (文化出版局, 東京, 2006)
-
- (受付 2016.3.23 受理 2016.7.11)